

R 不器用っ子が増えている

高玉 和子 11

けがが恐れず挑戦必要

最近の家庭では、子どもに「家の手伝い」をさせていないことがさまざまな調査から分かりました。以前は子どもが新聞を郵便ポストから取ったり、食事の配膳準備や後片づけを手伝ったりすることは当たり前でしたが、近年新聞を取っていない家庭や食器洗い乾燥機の普及などにより、手伝いの出番が減っています。

また、包丁で手を切ると大変だからと、調理の手伝いもさせません。子ども自身の生活も塾や習い事に忙しく、また共働き家庭の一般化で、子どもに手伝ってもらおうと時間がかかるので、親自身が家事を効率よく短時間で済ませたいと思っていることが、子どもから手伝いの機会を奪っています。

現代の子どもたちは、けがをして危険だという理由から包丁などの刃物から遠ざけられ、はさみやナイフなどの道具も使えなくなっています。しかし、刃物を使った子どもの事件は減る気配はありません。正しい使い方を理解していないため、刃物の利点も恐ろしさも知りません。

大人が単に刃物の使い方を子どもに教えていないことだけではありません。危険から

逃げる、あるいは避けることによって安全を確保しようとする「消極的安全教育」の弊害でもあります。刃物などの道具は「危ないから」と使わずにいたら、いつになっても安全に扱うことはできません。

刃物は危険だからと遠ざけているよりも、大人が正しい道具の使い方を子どもに伝えてこそ、危険を克服して使いこなすことができるようになります。小さなケガを恐れず、挑戦させることが大切です。最初は大人が正しい使い方を見本を示し、次に子どもと一緒に扱きましょう。

刃物類の扱いはすぐに子ども一人でさせずに、慣れるまでそばにいてサポートすることから始めます。子どもが刃物を正しく自由に使えるようになることは、手を創造的に使う基礎となります。これは危険なことに挑戦して克服し、それを日常的に使えるようにするという「積極的安全教育」であり、子どものチャレンジ精神を伸ばし、何事にも興味関心を持って取り組む姿勢を養うこととなります。

（駒沢女子短大保育科教授、NPO法人子どもの生活科学研究会監事）



※この記事は琉球新報社の提供です。

問い合わせ先：駒沢女子大学・駒沢女子短期大学 IR・広報部 prkomajo@komajo.ac.jp

この画像は、当該ページに限って琉球新報社の記事利用を許諾いただいたものです。